

【生活科】教科提案

五感を通して感じ、表現することで気付きの質を高める生活科 〜リアルな活動を通して、認識力の土台を育みながら〜

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

生活科のねらいは、意欲的に取り組む活動や体験を積むことで、「自立への基礎を養う」ことである。では「自立への基礎」とは何なのかを、低学年の発達課題とのかかわりで考えると、幼児期から学童期への移行期であり、およそ次のような発達課題がある。

①言語能力…「話しことば」から「書きことば」への移行。

体験したことを言語化することで認識力を養う。

②社会性…自己中心性から集団意識へ。自他の区別。コミュニケーション力。

③認識…社会・自然の認識。時間空間の連続性・系統性の獲得。数量・形の認識。

④感情…相手の反応や、対象との関わりを通じた感受性。意欲の形成。

⑤身体能力…手指の巧緻性、調整力（柔軟性、平衡感覚、反射能力など）の形成。

生活科は、子どもの生活の全てを対象とし、発達課題にせまっていく教科である。

①については、感じたことを絵や文字、ことばで表現することで、②については、「友だち」「上級生」など、「身近な人」とかかわる学習を通して、③については、生き物とかかわり、季節を感じる学習で「自然認識の土台作り」を、いろいろなひと、身近な地域、生産活動、仕事（労働）をすること、かけがえのない自分について、昔や世界の学習などを通して、④については、集団で学習すること、子どもにとって魅力ある教材開発をする（対象の選定）ことを通して、⑤については、生活で使う道具、おもちゃなどの工作やあそびを通して、応えていきたい。

本校の「問い続け学び続ける子どもたち」という提案は、生活科においては、「見る・聞く・嗅ぐ・触れる・食べる」といった五感を通じた活動によって、ひと・もの・ことへのかかわりを深めることが「問い続ける」活動であり、その過程での気づきや個別的な事実認識が生活科での「学び」であると考えている。

感じ方は子どもによってちがうため、感じたことを一人一人が多様な表現方法を駆使して伝え合う。また自分の気づきを確かめるために、実際に体験を繰り返したり、表現したりすることで追体験し、認識を深めるようにする。このようにそれぞれの気づきを交流し合い、つなぎ合うことで「あ、それもあったな。」と新たな気づきや、「そういう見方もあるのか。」と視点のひろがりを促し、自分の対象への関わりを深めていき、認識力を高めていく。

(2) サブテーマとかがわって

本校の提案サブテーマ「子どもの言葉でつくる授業」にかかわって、生活科における「子ども

の言葉でつくる授業」を考えてみたい。

①生活科における言葉とは

子どもの生活の全てを対象とし、五感で感じ、さまざまな表現方法で表現することで、気付きを深め、認識力を高める生活科においては、文字や話し言葉のみならず、絵、体の動き、身振り、活動の跡が残る成果物等、表現の全てが子どもの言葉である。気付きの反応や、気付きを伝えようとする表現を大切にみとり、授業を組み立てる。

と同時に、子どもの多様な表現から言語化を図り、いわゆる「言葉」数を増やすことで認識力を高めるようにしたい。

②子どもの言葉でつくる生活科の授業

表現の全てが生活科におけるこどもの言葉であるが、表現には2つの側面がある。ひとつは、気付きや感動を伝えるための表現であり、もうひとつは、前段でも述べた通り、気付きを確かめ、認識を深めるための表現である。伝えることをねらいとせず、1人もくもくと同じことを繰り返したり、表現したりして迫体験する活動も大切な「問い続け学び続ける」子どもの姿である。

(3) 生活科がめざす子ども像

学習指導要領では生活科の目標を次のように定めている。

「具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。」

ひと・もの・ことという視点から、生活科がめざす子ども像を考えてみたい。

	もの	ひと	こと
めざす子ども像	①自然にはたらきかけ、個別的事実認識ができる子 ・自然への興味関心 ・素材のもつ性質への気付き	①自分を大切にできる子 ・自分自身への関心・自信 ・	①社会に生きる自分を意識し、社会への関心をもつ子 ・家族への関心 ・自分にできる仕事への意欲 ・生活を支える人への気付き ・異質性への受容
	②工夫してもの作りができる子 ・素材へのかかわり ・素材の特性への気付き など	②友だちを大切にできる子 ・友だちや、身近な人とのかわり など	②さまざまな表現方法に親しみ、自己表現力を発揮できる子 ・コミュニケーション力 ・直接かかわる体験 など

ひと・もの・ことは、それぞれが分離したものではなく、互いに関わり合っている。

2. 生活科における「問い続け、学び続ける子どもたち」

実践事例（2年生「行くぞ！2B たんていだん！」）

「2B たんていだん」として、地域の公園を調査し、表現することで、新たな気付きがあったり、自分の気付きを見つめ直したりすることができ、地域を知ることの楽しさを感じてほしいと思えるように単元を設定した。伝えたいテーマごとにチームで絵や工作、まねっこなどで表現し、伝えた。

本時では、公園探検の中間報告を行った。子どもたちは、公園探検を通して、調べた「気」になっていた。そこで、今回の中間報告会で、報告を聞く子たちからのおたずねを通して、「調べが足りない」「もっと調べないと伝えら



～ 公園に隣接するお店 (F) のチームの報告会 ～

はるこ：Fは、どんなお店ですか。

あきこ：あとでのひみつです。あとでクイズに出します。

ふゆこ：横についているさしは何ですか。

あきこ：倒れないためです。

なつお：Fは、（発表者が描いた絵を指して）そういうお店なんですか。

あきこ：ちがいます。ここここに空を描いています。ここは時間がなくて描いてません。

れない」ということに気付いてほしいと考えた。以下、本時でのおたずねの様子である。

その後、お店チームはクイズを行うが、お店の様子が伝わりきれていないものであった。このことより、①教師が適切に出て、「確か」なものを伝える必要性を感じさせるが②報告をするための準備段階で、子どもたちが伝えるためのものをみとることの反省が出た。

～ 公園で地域の人がしていたスポーツ（ペタンク）のチームの報告会 ～

いちろう：（ペタンクの）ボールは持ちましたか。

じろう：持ちました。

はなこ：それで、ボールは何個分の重さでしたか。

じろう：ゴルフボール3，4個分ぐらいの重さです。

T：それは、ほんとうなの？

じろう：たぶんです。



以下、この報告会のふり返しシートである。

じろう：たぶん4個分だけど、ほんもののゴルフボールがどれぐらいの重さなのか分からないから、5個か4個かわかりません。

さぶろう：ペタンクチームで、てつのボールってほんとうか知りたいです。

たろう：ペタンクのボールのおもさが分からないからさわってみたいです。

このように、表現することで、次の問いをもち、学び続ける姿になるのではないかと考える。

3. 研究の展望 ※6つのR

①リアルな体験, 学習と生活の結合 ※real raw material

子どもによって興味の対象は違う。そこで、1人の言葉から出発したり、身近な現象や素材への興味を引き出したり、みんなの世界をひろげていくような単元構成が必要である。連続性・系統性、つまり子どもが意識の中に「テーマ」をもてるように配慮し、素材・体験ともにほんものに触れられるようにし、学習したことが現実感をともなうようにする。素材そのものにこだわり、素材の本質に迫る活動を多く取り入れる。

②季節を感じる活動（季節の遊び, 季節を食べる・栽培・飼育）※real time

現代は「季節感」が感じられにくい。とはいうものの、附属小は自然に恵まれた環境にある。四季の移ろいの美しい日本をよく知るために、附属小の環境も最大限に活用しながら、季節毎の自然の特徴や年中行事、習慣、遊び、店の商品やディスプレイ、人々の装いや食べ物などを経験させる。

③人とかかわる活動 ※relation

人は、常に誰かと関わって生きている。コミュニケーション力のベースになるのは「かかわりたい」「知り合いたい」という前向きな意欲である。子どもの生活を支えるさまざまな人にかかわり、仕事への気付きや、人とかかわることへの意欲を育てる。「こんな人になりたい」「あんなふうになりたい」と憧れを感じたり、世界をひろげるきっかけになったりするような出会いをさせたい。

④表現活動の充実 ※representation

活動や体験を通して、学ぶことは多い。表現活動を充実させることで、さらに認識を深め、新たな気付きを促すことができる。また表現を交流し、伝え合う活動により、友だちの考えや気付きに触れ、対象に対する認識はさらに深まる。

⑤異質性を認め合う（世界を知ろう） ※respect

自己中心的なものの見方から、多様性や異質性へ目を向けるとともに、共通性にも気付き、互いに尊び合い、コミュニケーション力の基礎を育むために世界の人々の生活や食べ物、言葉、遊びなどを実際に体験できるようにしたい。

4. 研究の評価

リアルな体験を通して、学習と生活を結びつけることができたか。

季節感のある学習活動を通して、季節の移ろいや変化に気付くことができたか。

人とかかわる中で、自分の生活にかかわる多くの人の存在に気付き、自分の生活を見つめる目が豊かになったか。

表現活動を通して、認識力を深めるとともに、友だちと自分の気付きを交流する楽しさを感じることができたか。

自分と相手の違いに気付き、興味をもってかかわることができたか。